

浅間山の植物

池田登志男

Toshio Ikeda: Plants of Mt. Asama

1. はじめに

佐久平の北に聳え立つ浅間山 (2568 m) は、活火山で三重式成層火山である。牙山、剣ヶ峰、黒斑山などは外側外輪山の一部で、この外輪山の東半は現在残っていない。外側のカルデラ壁の外斜面は比較的急であるが下方は次第にゆるやかになって南と西南方に広い裾野を展開している。またカルデラ壁の内側の斜面は急斜面で崖面には溶岩及び火山碎屑岩が成層している状態がよく観察できる。外側外輪山とその東側の前掛山との間に挟まれている湯の平及び天狗の露地の凹地は第1次の火山原であって、ここより流れ出る蛇堀川は牙山と黒斑山との間の地獄谷の火口瀬でカルデラ壁を切っている。

前掛山と東前掛山とが内側外輪山で、外側外輪山の活動に続いて活動した中期の火口である。釜山は内側外輪山の中に噴出した中央火口丘である。内側外輪山の内部は、釜山によって殆ど埋めつくされているため、釜山と

前掛山との間の無限の谷及び釜山と東前掛山との間の小規模な凹地が火口原の一部としてわずかに認められる程度である。中央火口丘である釜山は規則正しい截頭円錐形をなしその頂上部には直径400 mのほぼ円形の火口が存在し、火口壁は東及び西が高く、南と北がやや低くなっている (「北佐久郡志」より)。

以上が浅間山の地形の概略である。「浅間山」と言う時、現在の釜山だけを指す場合もあるが、ここでは外側外輪山の火口壁あたりまでと、小諸口登山道と御代田口登山道の標高1500 m以上の一帯についての植物分布について述べることにする。

2. 浅間山の植物分布の概観

浅間山荘～一の鳥居～二の鳥居

小諸から浅間山荘までは車で入れる。標高1400 mの浅間山荘から広い林道は蛇堀川と3回交差して一の鳥居、不動の滝を経て二の鳥居に至る。このあたりで目につく主な植物と

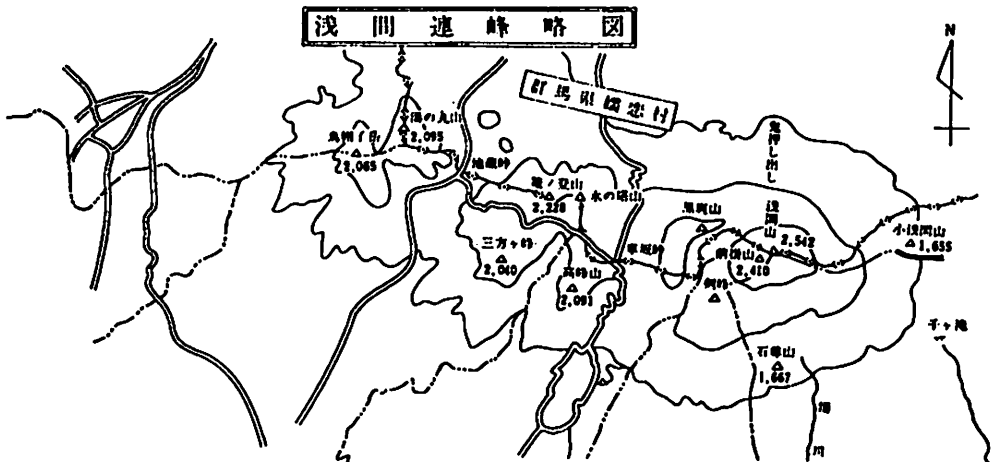


図1. 浅間連峰略図

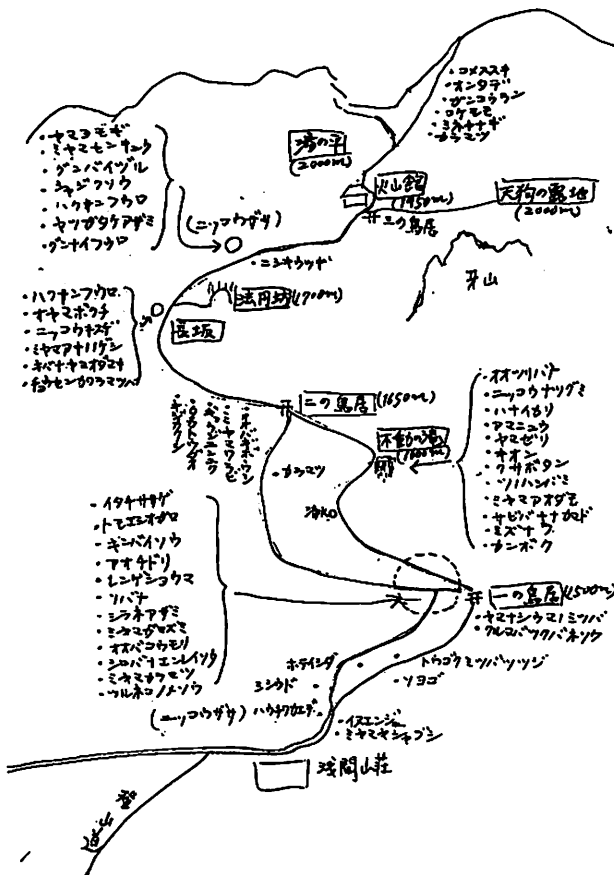


図2. 登山道周辺の主な植物 (小諸口)

しては、オノエヤナギ、ズミ、イヌエンジュ、ヤマウルシ、ツノハシバミ、ツリバナ、ニッコウナツグミ、バッコヤナギ、ミヤマザクラ、リョウブ、ムシカリ、ヤマツツジ、トウゴクミツバツツジ、ニシキウツギ、イヌコリヤナギ、バイカウツギ、オオツリバナ、ノイバラ、コマユミ、シモツケ、ヤマハギ、タカネザクラ、ミヤマウグイスカグラ、ユモトマユミ、ホタルサイコ、キツネガヤ、セイタカトウヒレン、シシウド、ゴマナ、アケボノスミレ、タチツボスミレ、エイザンスミレ、ジシバリ、アレチマツヨイグサ、アマニユウ、キオン、モメンヅル、キバナアキギリ、スズラン、カワラスゲ、セリモドキ、ササバギンラン、ノハラクサフジ、ミヤマアキノノゲシ、ミヤマ

モジズリ、ヨツバヒヨドリ、ミツバベンケイソウ、ミヤマタムラソウ、ホソバガクビソウ、ハネガヤ、クサイ、レンゲショウマ、ソヨゴ、ホテイシダ、ヤマナシウマノミツバ、アオチドリ、キンバイソウ、ツルキジムシロ、ミヤマアオダモ、カラマツ、ヤマハンノキ、ヤハズハンノキ、オオバコウモリ、ミヤマカラマツなどがある。

この一帯で注目すべき植物としては、ヤマナシウマノミツバ、レンゲショウマ、セリモドキ、オオツリバナ、ツルキジムシロ、ソヨゴ、ホテイシダなどがある。

二の島居～長坂～三の島居・火山館

山麓の1000 m林道(標高1000 mのあたりを通過している林道)のあたりからササの群生地が多く、登山道沿いでも一面のササの中にカラマツやミヤマアオダモ、ナナカマドなどが林を作っている所、木がなくてササだけの所などが見られる。ササの分類は難しく、不確かであるがミヤコザサに似ているニッコウザサと思われるが、湯の平まで分布している。法円坊の入口付近ではササが無くなって一面イワノガリヤスが群生している所も多い。

い。

法円坊のあたりはアズマシャクナゲ、トウゴクミツバツツジが多く、花期には見事である。ハクサンイチゲ、ユキワリソウ、ギョウジャニンニク、ツルキジムシロなどもある。昨年、今井建樹氏と調査の折に、同氏によってニオイシダの分布が確認された。

牙山の絶壁あたりには貴重種が多く、ムシトリスミレ、ユキワリソウ、ウラジロヨウラク、ハクサンイチゲ、チシマアマナ、チシマゼキショウ、コメツツジ、アズマシャクナゲ、キバナノコマノツメ、コキンレイカ、イワインチン、ヒメシャジン、イワカガミ、ミソガワソウ、ミヤマホツツジ、ミヤマニンジン、コタヌキラン、キリンソウ、シャジクソウ、

ツルキジムシロなどが見られる。

火山館・三の鳥居のすぐ下が蛇堀川の源流で、高木のない道端には、ヒメシャジン、イワカガミ、タカネナデシコ、コメススキ、オンタデ、コタヌキラン、ハクサンイチゲ、クロマメノキ、ハクサンシャクナゲ、マンネンスギ、バイケイソウ、コケモモ、ミネヤナギ、コヨウラクツツジ、ハリブキ、コキンレイカ、ホソバノキノチドリ、イワオウギ、ガンコウラン、イワヒゲ、スズラン、シャジクソウ、イタドリなどがある。

湯の平

火山館（1900 m）からわずかに登ると湯の平である。火山館の上の斜面から上の平かけて、ハクサンイチゲが群生し6月ごろには白い花がみごとである。また草地の中にはアヤメの群落もある。登山道は湯の平の右端のあたりを緩やかに登っている。カラマツやシラビソがまばらに生え、タカネザクラ、ナナカマド、オオシラビソ、ハクサンシャクナゲ、ミヤマハンノキなども混じる。登山道沿いで見られる主なものとしては、クロウズゴ、ミネヤナギ、ガンコウラン、コケモモ、ムカゴトラノオ、シシウド、スズラン、イワカガミ、シロバナノヘビイチゴ、イワノガリヤス、ハクサンフウロ、ゲンバイヅル、シャジクソウ、マツムシソウ、コタヌキラン、マイヅルソウ、ヤマブキショウマ、ヒメシャジン、オオバコ、イタドリなどがある。湯の平を抜けた標高およそ2100 mほどで、このあたりが森林限界である。そして山頂へ向かう道と賽の川原への道に分かれている。カラマツ、シラビソ、ナナカマドなどの背丈がだんだん低くなり、ミヤマハンノキが多くなって林が終わる。

大きな火山弾があちこちに散らばる斜面に小さなカラマツとミネヤナギが点在し、シラ

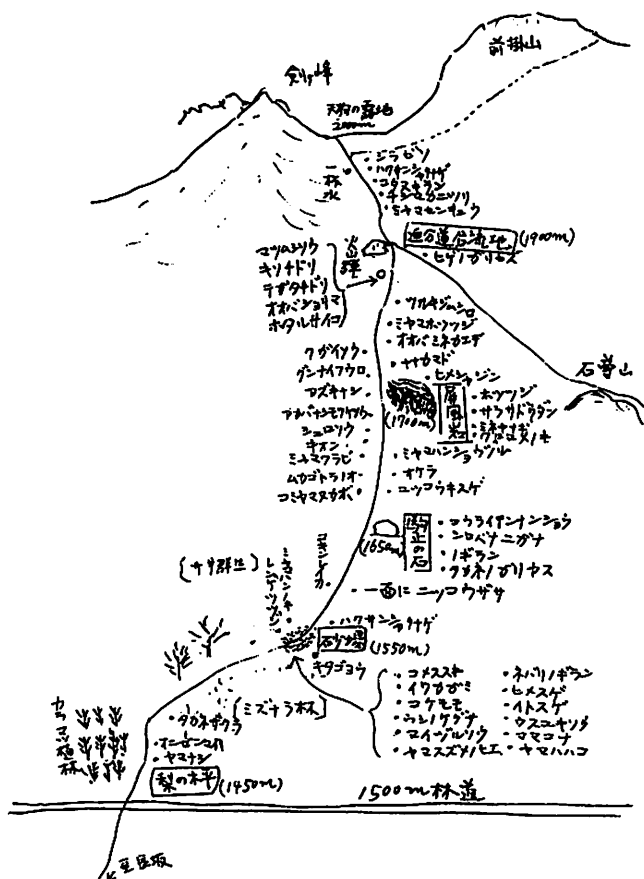


図3. 登山道周辺の植物（御代田口）

タマノキ、ツガザクラ、コケモモ、ガンコウラン、マンネンスギ、ノギラン、ヒメスゲ、ネバリノギラン、クロマメノキ、ミネズオウ、ミヤマアキノキリンソウ、イワカガミ、タカネニガナ、コメバツガザクラなどが見られる。

湯の平全体の植物分布をみると、ニッコウザサやイワノガリヤスの群生する草原が広がり、その中にカラマツの林、シラビソ・オオシラビソの林があり、それらにタカネザクラ、ミヤマハンノキ、ナナカマド、キタゴヨウなどの混在する林、また一面のササの中にこれらの樹木が点在するところなどもある。

外輪山の絶壁に近いあたりには火口原湖が痕跡をとどめその周辺は湿原になっている。周囲はシラビソ林やササ原になり、雨の多い

年の6月ごろには湿原が広がり、日照りの夏には、わずかにその面影を残すだけになる。一部にはミズゴケが厚い層を作り、ミツバオウレン、マツムシソウ、イワカガミ、コタヌキラン、ネバリノギラン、クロマメノキ、ミネズオウなどのほか、湿地の中には小さなアカマツやカラマツも見られ、ユキワリソウも多い。

天狗の露地

三の鳥居・火山館から湯の平への道と分かれて牙山と前掛山との間に入ると天狗の露地である。シラビソ、オオシラビソ、ナナカマド、ダケカンバ、トウヒなどの林の中には、ヒカゲノカズラ、シシガシラ、バイケイソウ、ミヤマフタバラン、キソチドリ、ミツバオウレン、タケシマラン、ツバメオモト、ゴゼンタチバナ、コミヤマカタバミなどが見られる。林はだんだん樹木がまばらになり、やがて前掛山を背景にしてすばらしい天然の露地になる。大小さまざまなカラマツが点在し、ナナカマド、キタゴヨウ、ダケカンバ、トウヒ、シラビソなども混ざり、あちこちにミヤマハンノキやハクサンシャクナゲも見られる。地面にはハクサンイチゲ、ツマトリソウ、マツムシソウ、ミヤマシャジン、コキンレイカ、クルマユリ、タカネニガナ、シラタマノキ、コケモモ、ガンコウラン、クロマメノキ、コメススキ、ウスユキソウ、ネバリノギラン、イワインチン、カニコウモリ、エゾスズラン、キソチドリ、ミヤマホツツジ、ミネズオウ、ミネヤナギ、ヒメイズイ、ウシノケグサ、ジンヨウイチヤクソウ、シャジクソウ、ウメバチソウ、ワレモコウ、オニク、ヒメスゲなどがある。



写真1. ミズナラ林 1991.10.22

御代田口登山道

御代田からの浅間登山道は長坂の部落から登っている。標高1400 mを越えた梨ノ木平あたりから、「砂場」と呼ばれて砂の露出している地点を通り、「駒止の石」、「屏風岩」(1700 m)を経て、追分からの登山道と合流して「一杯水」の水場に至る。そこから数分登ると道は2つに分かれ真直ぐに行くと天狗の露地へ、右に曲がると前掛山を経て山頂への道である。

この登山道の一帯は前掛山と剣ヶ峰の南斜面で、梨ノ木平から屏風岩のあたりまでは、みごとなミズナラ林である。林の中には、シラカバ、アカマツ、サビバナナカマド、ミヤマシャブシ、キタゴヨウ、カラマツなどがあちこちにわずかに見られる。地面はニッコウザサの群生する所が多く、その中にレンゲツツジ、イボタノキ、サワフタギ、ニシキウツギ、シモツケ、シシウド、アキノキリンソウ、ワレモコウ、アカバナシモツケソウ、ヘビノネゴザ、ワラビ、ヤマハハコ、ハンゴンソウ、タムラソウ、アマニュウなどが目につく。

屏風岩のあたりでは、カラマツ、ミズナラ、ダケカンバなどの林の中にミヤマハンノキ、

2500 (m)				
2450			・コノススキ ・オンタチ 点	
2400			・ガンコウラン ・オンタチ ・コノススキ (1株)	・コノススキ ・イワノガリヤス (1かたまり)
2350		・オンタチ (上段)		・コノススキ ・コノススキ (かたまり) ・ガンコウラン ・ミネヤナギ
2300	・コノススキ (2株確認)	・コノススキ ・オンタチ (こくまれ)	・オンタチ ・コノススキ まばら	・コノススキ ・カラマツ ・ミネズオウ ・ガンコウラン ・ミネヤナギ
2250	・コノススキ (こくまれ)	・オンタチ ・コノススキ (こくまれ)	・イタドリ ・コノススキ ・ガンコウラン ・ミネヤナギ	・カラマツ ・ミネズオウ ・ガンコウラン ・クロマノノキ ・ミネヤナギ
2200	・コノススキ (オンタチ)	・オンタチ ・コノススキ	・ミネヤナギ ・ガンコウラン ・オンタチ ・コノススキ	・カラマツ ・ツガザクラ ・ミネズオウ ・ガンコウラン ・クロマノノキ ・ミネヤナギ ・ダケカンバ
2150	・コノススキ ・ミネヤナギ ・イタドリ ・ツガザクラ ・コノススキ ・コノススキ	・オンタチ ・コノススキ ・コノススキ	・ミネヤナギ ・ガンコウラン ・コノススキ ・オンタチ ・ミネヤナギ	・マイヅルソウ (1か所) ・イタドリ ・ミネズオウ ・コケモモ ・ガンコウラン ・コノススキ
2100		・オンタチ ・コノススキ ・コノススキ ・イワカガミ ・コノススキ ・ミネズオウ ・ミヤマハノキ ・クロマノノキ ・ミネヤナギ ・ガンコウラン ・コノススキ ・カラマツ		以下は省略
2050	・コノススキ ・ガンコウラン ・ミネズオウ ・ミネヤナギ ・タカネザクラ ・ミヤマハノキ ・ナナカマド ・カラマツ	以下省略	以下は省略	
標高 500m	1974年 (昭49) 6月3日	1978年 (昭53) 8月10日	1981年 (平3) 7月7日	1981年 (平3) 10月22日 (前登山道側面)
	湯の平からの登山道沿い			御代田登山道沿い

表1. 浅間山の植物分布調査結果



写真2. 浅間山 2100～2200 m 付近。後方は剣ヶ峰・芽山 1996.6.5

ナナカマド、サラサドウダン、クロマメノキ、コケモモ、イワカガミ、マイヅルソウ、ヒメシャジン、ゲンナイツウロ、クガイソウ、タカネノガリヤス、チョウジコメツツジなどが見られる。

追分からの道と合流したあたりから一杯水までの主なものとしては、シラタマノキ、リンドウ、ミヤマニンジン、ノアザミ、マツムシソウ、シャジクソウ、ゲンバイソウ、ネバ

リノギラン、ツルキジムシロ、コキンレイカ、タカネザクラ、ダケカンバ、シラビソ、オオシラビソ、カラムツ、ショウジョウバカマ、シシウド、クサイ、ミヤマメシダ、ハクサンイチゲ、ノビネチドリ、マルバダケブキ、アマニュウ、リシリカニツリなどがある。

前掛山～釜山

平らな火口原である湯の平、天狗の露地から前掛山の山体の斜面が始まり、わずかに登った標高2050～2100 mあたりが森

林限界になり、そこから上は小さなカラムツ、ミネヤナギ、クロマメノキ、コケモモ、ガンコウラン、ミネズオウ、ツガザクラ、コメバツガザクラ、イワカガミ、コメススキ、イタドリ、オンタデ、タカネニガナなどになる。そしてそれらは標高が高くなるにつれて量も種類も次第に減っていく（別表参照）。

1990～93年の調査では、オンタデとコメススキは2420 mの無限の谷まで、2500 mの前掛

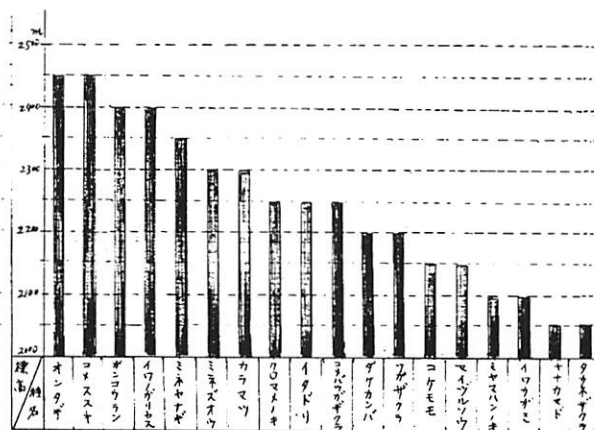


図4. 浅間山に分布する植物とその上限 (1991年調査)

山頂近くまでオンタデが分布していた。1970年の調査では前年の爆発の影響があったのか2200 m付近はコメススキとオンタデがまばらで、2250 mあたりはコメススキとオンタデがごくまれで、2300 mではコメススキが2株確認でただけであった。その翌年にはオンタデが多くなりコメススキの上限は2300 mまで、オンタデは2350 mまで達していたが、現在と比較して植物分布の量はかなり少なく上限も低かった。

浅間山の植物分布は、噴火など火山活動と深い関連があることは容易に予想でき、それは過去の調査記録からもうかがえる（後述）。

3. 浅間山の植物分布の記録

浅間山の火山活動に関する研究が多いことはもちろんであるが、植物分布についての調査研究も少なくない。過去に分布していた植物が現在見られなくなった原因の多くは開発や乱獲によるものが目立つが、浅間山はそのほかに火山活動の影響も大きい。また過去の調査の誤認も否定できない。ここでその原因を究明することはできないが、問題として検討を要すると思われる植物を挙げておきたい。

なお、最後に、浅間山で発見された植物について付記しておく。

(1) 浅間山の植物、浅間山の植物目録

田中貢一 明治36年（1903年）

明治36年7月19日、小諸から山頂に登り無限の谷を経て屏風岩を通して御代田の真楽寺に至る植物分布の調査記録とその目録を同年7月24日から数回にわたって信濃毎日新聞に連載したもので目録では藓苔類等16種を含めて445種ほどを記している。

この中で注目すべき種としては次のようなものが記されている。

ムシャリンドウ、タテヤマウツボグサ、カキツバタ、ヤマユリ、ムラサキ、アズマギク、スズサイコ、アツモリソウ、サンリンソウ、ミヤマナナカマド、マメザクラ、アオノツガザクラ、イワスゲ、イワヤナギ、ゲンジスミ

レ、フジバカマ、ツルキジムシロ、バイカツツジ、ブナ、イブキトラノオ、イワベンケイ、ハクサンサイコなど。

(2) 長野県北佐久郡植物目録

信濃教育会北佐久部会 昭和8年（1933年）

本書に浅間山を産地として記録されていて、現在確認できないものや絶滅に近いものを挙げると次のようなものがある。

ハイマツ、カニツリススキ、チシマラッキョウ、イワヤナギ、シロバナサクラタデ、ミヤマミミナグサ、タカネミミナグサ、オウレン、モミジカラマツ、ハナハタザオ、ヒメレンリソウ、ハクサンタイゲキ、カラフトツリバナ、スマレサイシン、マルバグミ、マメグミ、エンピセンノウ、ムラサキ、ハナイバナ、ヒメオトギリ、エゾニユウ、アカモノ、ツリガネツツジ、キバナシャクナゲ、ユキワリソウ、トウヤクリンドウ、イヌハッカ、アキチヨウジ、エゾコゴメグサ、ミヤマママコナ、ヒキヨモギ、オカウツボ、ムシトリスミレ、キツネノマゴ、イワギキョウ、ミヤマオトコヨモギ、タニウツギ、ヤマルリソウ、フジバカマ、イワウメなど。

(3) 浅間山の植物（予報） 伊藤 洋

The Botanical Magazine No.564 1933年

浅間山を、こめすすき、おんたで帯、がんこうらん帯、しらべ帯、みずなら帯に分けて植物分布を述べ、目録をつけている。

合弁花類	219種
離弁花類	333
双子葉類	552
単子葉類	139
被子植物	691
裸子植物	14
顕花植物	705
シダ植物	52
計	757種

（変種以下ハ除ク）

目録の中で★印のあるものは文献（主に北佐久郡植物誌）によるもの又は信すべき人よ

り聞いたものに付けた。としている。そして北佐久郡植物目録から上に記した種の大部分のものに★が付けられている。

同氏の目録の中から★印の付いていない植物で注目すべき種としては次のようなものがある。

ミヤマアブラススキ、ヒンジモ、コアカソ、マルバウツギ、シャク、ウスギシャクナゲ、ヤブムラサキ、オオアカウキクサ、トウオオバコ、タニウツギ、ヒトツバヨモギ、ヨブスマソウ、フジバカマ、トリアシショウマ、ヒメオトギリ、マメグミなど。

(4) 浅間山の植物と其の目録

中條正勝 信濃教育 昭和11年2月号

山麓から、赤松帯、潤葉樹帯、モミ・ツガ帯、砂礫帯に分けて植物分布を述べ、さらに垂直的分布、等高線における分布などを記し、目録には、1105種を記載している。

その中で注目すべき種をあげると次のようなものがある。

ヒメウラジロ、ホテイシダ、アカウキクサ、ギョウギシバ、タヌキラン、ワタスゲ、チシマラッキョウ、ヤマユリ、キチジョウソウ、コバイケイソウ、カエデドコロ、ククバドコロ、キンラン、アツモリソウ、サカネラン、ヤマトキソウ、イワヤナギ、カラフトヤナギ、アキニレ、シロバナサクラタデ、イブキトラノオ、ムカゴトラノオ、ミヤマミミナグサ、エンビセンノウ、サンリンソウ、レンゲショウマ、カザグルマ、ベニバナヤマシャクヤク、モミジカラマツ、クジラグサ、トリアシショウマ、ジンジソウ、マメザクラ、タカネナナカマド、クサネム、ヒメレンリソウ、エビラフジ、カラフトツリバナ、クロヅル、エゾニユウ、シャク、ハナウド、ドウダンツツジ、ツリガネツツジ、ウスギシャクナゲ、ヒカゲツツジ、エゴノキ、ハルリンドウ、ミツガシワ、イヌセンブリ、スズサイコ、ハマヒルガオ、ムラサキ、ヤマルリソウ、ヤブムラサキ、ジャコウソウ、ムシャリンドウ、キセワタ、イヌハッカ、クロバナヒキオコシ、マルバノ

ホロシ、ミヤマコゴメグサ、エゾコゴメグサ、ミヤママコナ、ヒキヨモギ、ナンバンギセル、オカウツボ、ムシトリスミレ、キクムグラ、オオアカネ、タニウツギ、クロミノウグイスカグラ、オウガ、ウサギギク、フジバカマ、ミヤマオトコヨモギ、ヤマタバコなど。

(5) 北佐久郡志 第1巻 自然篇

北佐久郡志刊行会 昭和30年(1955年)

「浅間山の植物とその目録」が記載されているが、これは前記の中條正勝の信濃教育(昭和11年)の論文を、ほとんどそのまま転載しているため、発行は昭和30年であるが浅間山の植物調査の記録としては論外のものである。

(6) 信州佐久の植物

昭和50年(1975年) 佐久教育会

植物目録には浅間山に分布する貴重種が多く記されているが、以前の文献からの引用と臨地調査による記録との区別がないので、本書が発刊された当時の分布か否かが不明である。

以上、浅間山の植物分布に関する主な文献について記したが、それぞれ、発表や発刊のねらい、調査範囲や方法、その他いろいろ条件が異なるものを一概に比較はできないが、浅間山の植物分布とその変遷を検討するためには貴重な資料である。

(7) 浅間山で発見された植物

(信州佐久の植物 1975(S50) 佐久教育会による)

佐久では多くの植物が新種として発見されている。浅間山は、八ヶ岳、軽井沢について多く、14種(変種、品種も含む)ある。採集または発表の古い順に記すと次のようである。
ヒカゲノカズラ(ヒカゲノカズラ科)

Savatierが明治12年(1879年)に採集。この標本をタイプに中井猛之進が大正14年(1925年)に発表した。

ミヤマウイキョウ (セリ科)

田中芳男が明治12年(1879年)に採集。
FranchetとSavatierが1879年に発表した。

グンバイヅル (マルバクワガタ) (ゴマノハグサ科)

田中芳男とVernyが明治12年(1879年)に採集。FranchetとSavatierが1879年に発表した。

ミヤマコウゾリナ (キク科)

田中芳男が明治12年(1879年)に採集。
FranchetとSavatierが1879年に発表した。

イワベンケイ (ベンケイソウ科)

田代安定が採集した標本をタイプとして、
FranchetとSavatierが明治12年(1879年)に発表した。

アサマフウロ (フウロソウ科)

大渡忠太郎が明治27年(1894年)に採集したものを基準標本にして、松村任三が明治34年(1901年)に発表した。

ホソバヒメシャジン (キキョウ科)

片平S氏が明治38年(1905年)7月30日に発見したものを武田久吉が明治43年(1910年)に発表した。ヒメシャジンは中葉がもっとも大きく、幅は8~20(~30) mm、ホソバヒメシャジンは2~8 mm。

ホソバミヤマシャジン (キキョウ科)

望月精一が大正2年(1913年)7月25日に発見採集したものを基準標本として、北村四郎が昭和11年(1936年)に発表。ミヤマシャジンは中葉の幅は15~25 mm、ホソバミヤマシャジンは15 mm以下である。

アサマカンゾウ (ユリ科)

小泉源一が大正13年(1924年)7月28日に採集、大正14年(1925年)に発表。現在はニッコウキスゲと同一視されている。

フギレイヌシダ (イノモトソウ科)

近藤武夫が発見、中井猛之進が昭和5年(1930年)に発表。現在は「フギレイヌシダは葉の裂片が細かく深く切れこんだ奇形で、イヌシダと区別する必要はない。」とされている。

オオコガネネコノメソウ (ユキノシタ科)

原寛が採集し、昭和10年(1935年)に植物研究雑誌及び大日本植物誌ユキノシタ科に発

表した。

アサマヌカボ (イネ科)

尾台多可志が昭和15年(1940年)に発見した標本をタイプとして本田正次が1941年に発表した。現在は母種ミヤマヌカボと同一視している。

アサマスゲ (カヤツリグサ科)

秋山茂雄によると「本州(浅間山・信濃・武蔵・常陸)の草地特産」とあり、浅間山での発見と考えられる。

ムシトリスミレ (タヌキモ科)

牧野富太郎は日本植物図鑑に「第一の発見地は信州浅間山なり。」としている。奥山春季はムシトリスミレの項で「1865年に須川長之助氏が採集した標本がソ連に保存されている。記録としては江戸末期の嘉永年間に富山藩主の前田利保侯(益斉)が信州浅間山産のものを画家に描かせた」と述べている。

参考文献

- 田中貢一 1903. 浅間山の植物, 浅間山の植物目録. 信濃毎日新聞.
北佐久教育会 1933. 北佐久郡植物目録.
伊藤 洋 1933. 浅間山ノ植物 (予報). The Botanical Magazine No.564.
中條正勝 1936. 浅間山の植物と其の目録. 信濃教育 昭和11年2月号.
北佐久教育会 1955. 北佐久郡志 第1巻 自然篇. 北佐久郡志刊行会.
佐久教育会 1975. 信州佐久の植物.
池田登志男 1975. 浅間連峰の植物. 信濃教育 1066号 (昭和50年9月号).
横内 斎・池田登志男 1975. 浅間連峰の植物. 長野林友 1975 No.4.